20170326

結論はミッション（ヨハネ21:15-17）

神様がクリスチャンの私たちを召されたときには、一人一人が必ず勝利の人生を歩み、今もさまよい続けているたましいを助けることができるように私たちを導いていらっしゃいます。その本格的な神様の答え、つまり、今までとは次元が全く違う新しい人生のスタートというのは、クリスチャン一人一人がミッションを結論としてしっかりキャッチするときです。結論としてのミッションというのは、私たちが見たときには良いこと、悪いこと、ときには過ちもあるし、失敗することもあります。あるときには、褒められる時もあるかもしれません。そういった全てを全部総合してたどり着いたところです。聖書もそのようにミッションという結論のほうに私たちを導いていらっしゃるし、神様も私たちの全てを動かして、結局、結論というのはミッションのほうに私たちを導かれるお方です。それがしっかりわかっていれば、楽しかったこと、辛いこと、苦しかったこと、嬉しかったことなど、いろいろあるでしょうけれども、単純に辛い、嬉しいで終わらないと思います。そのすべてが結局、結論はミッションの人生に歩むためにあったものなのです。それが結論というものです。そうでなければ辛いことが辛いままとらわれて、嬉しいことには嬉しいままそこにとどまっているようになるしかありません。なかなか、クリスチャンなのに前進を見ることができないのではないでしょうか。イエス様が復活したあと、今日の聖書を見ますと、魚をとっていった弟子たちの前に三度現れたと書いてあります。つまり、復活した後、部屋に閉じこもっていた弟子たちの前に現れて、「平和があなたがたのうちにありますように」と息を吹き込んで聖霊を受けなさいとそこまでなさいました。それにもかかわらず、彼らはそのイエス様の復活を見たのにも関わらず、ミッションが未だに結論になっていないわけです。そのため魚を取りに行こうかということになっていたわけです。しかし、イエス様は、何も責めないで、叱られず、忍耐を持って2度3度訪問されて、彼らにミッションを悟らせる、そういう場面です。ただのミッションではありません。結論としてのミッションになったときに、動かないようになるし、揺れることがありません。何が何でもミッションに釘を刺して、それを中心にしてすべてのことを見て、また解釈していくようになるものです。そこから本当に現場を変えて、また自分自身もいやされて、この世界を変えていく神様の本格的な答えを見るようになるということです。ですから、ミッションというのは大切なテーマになるのです。イエス様が3度も弟子たちの前に現れて、ミッションにたどり着くようにするために、何をどうされたのか、私たちが結論としてミッションをしっかりと手に入れて、本格的な新しい人生を歩むためには、どうすれば良いのか、何が必要なのかということです。

まず第一に、神様が私たちを召されたことを思い起こすことです。私たちがどこで、どのように神様に召されたのか、そのことをイエス様が弟子たちの前に三度現れたときに、それを想い起こさせていらっしゃいました。弟子たちが魚をとっていた時に、なかなか魚がとれない状態でした。そこでイエス様が現れて、右の方に網を投げてみなさいとおっしゃいました。すると、今まで1匹も取ることができなかったのに、イエス様の指示に従って網をそこに投げたら、ものすごく魚がとれるようになったのです。そんな時に、ふと気づくようになりました。ほら、イエス様なのだよ。私が来たのだよ。それでペテロが海の中に飛び降りて、イエス様のほうに走っていきました。それは何を意味するのでしょうか。ペテロが一番最初にイエス様だとわかって、そこで跪いてイエス様に召された場面と全く同じ場面なのです。一晩中網を下ろして魚をとろうとしていたのですが、1匹もとることができませんでした。そこにイエス様が現れて、「わたしが指示するところに網を投げなさい」とおっしゃいました。漁師の常識に従いますと、そこにこの時期に網を投げても魚を取る事はできないわけです。しかし、イエス様の指示通りに網を投げた時に、多くの魚をとることができました。そこでペテロがイエス様の前にひざまずいて、「主よ私は罪人です。私から離れてください」そのような告白をした時がありました。その時にイエス様は「わたしについて来なさい。わたしがあなたを人間をとる漁師にしてあげよう」とおっしゃって、網もすべて全部捨ててイエス様に従いました。一番最初にイエス様と向き合って、それでイエス様に召された場面です。それとそっくりな場面なのです。つまり、ミッションの結論にたどりつかせるために、イエス様は私たちに何をなさるのかといいますと、神様は私たちをお召しになった、その神様のお召しがどういうものなのか、あなたはどのようにして神様に召されるようになったのか、そのことを思い起こしなさいとおっしゃいます。そうすると、私たちはミッションという結論にたどり着くようになります。私たちは気づいていなかったでしょうけれども、実は神様が私たちをめ召されたのは、私たちが滅びの運命のところにいたときに、そこから私たちを召されました。そのことをしっかり思い起こさなければいけません。私たちが神様に見召されたときに、実はどこに私たちがいたのかといいますと、ヨハネ8:44で言われているように、あなたがたはあなたがたの父である悪魔から出たものであると言われる存在だったわけです。そこから私たちは召されました。ですから、残念ながら、何をどうするのかと関係なく、エペソ2:3にあるように、生まれながら神の御怒りを受けるしかない存在だったわけです。そのようなところから、神様が私たちを召されました。エペソ2:1にあるように、 自分では一生懸命がんばって、いろいろな工夫をしていたしでしょうけれども、実は自分の罪と罪過の中にあって死んでいたものだったのです。そういうところから私たちを召されました。ですから、何をどうするか、がんばるかがんばらないかと一切関係なく、滅びるしかないのです。死と罪の原理にとらわれて、滅びの運命の中を歩いていたその時に私たちを召されたのです。そのままずっと行きますと、ヘブル9:27にあるように、一度死ぬことと、死後にはさばきを受けることが定まっていたのです。さばかれる運命を抱えて人生を生きていて、そのままもし死んだとすれば、地獄に行くしかない存在でした。そのようなところに私たちは生きていたのです。そこから神様は私たちを召されました。基本、滅びるしかないし、本当に何も良い事はないのです。本当にそこから私たちが召されたと気づいていらっしゃるのでしょうか。神様のお召しと言うのがどういうことなのか分かれば、結論としてミッションにしっかりくっつくようになるしかありません。しかし、残念ながら多くのクリスチャンが、これをついつい忘れてしまいます。召されるきっかけというものはそれぞれ皆違います。それもしっかり思い起こさなければいけません。私は何があってもこのような罪人を、このように汚れているものを、このような地獄の人間を神様が憐れみ召してくださったということを思い起こすたびに、神様を恨むとか、神様は間違っているというのは、これっぽっちも考えることができません。たとえ私が死の陰の谷を歩くことがあっても。そうではないでしょうか。皆さんはどのように神様に召されるようになったのでしょうか。

そして、基本、そのようなところから召されたので、私たちが疲れて重荷を背負って人生は歩いていた、そういう時です。そうなるしかありませんでした。エペソ2:2に書いてあるように、自分はそういうつもりはないのでしょうけれども、空中の権威を持つ悪魔に従う、そのような人生の生き方しかできなかったわけです。その悪魔が作り上げた世の流れというものは、神はいない、神はいらない、人間最高というものです。それに従って生きるしかなかったものではないでしょうか。どんなに頑張っても、最終的には疲れて重荷を負うようになる人生でした。人生そのものが重いわけです。精神的にダメージを受けるしかない、そして、それが結局私たちの体も目に見えるものもボロボロにさせることによって、肉体的にも様々な病気を患うようになるしかなかっ他わけです。そして、ルカ16:19-32のラザロと金持ちの例えからもわかるように、生きること自体がもう失敗なのです。結局、何をどうするかは二の次のことで、ヘブル2:15に書いてあるように、一生、死の恐怖に繋がれて奴隷として人生を生きるようになるしかありません。そして、そのような人生の重荷、どうすることもできない問題が子孫たちにも遺産として受け継がれるようになるという疲れと重荷を背負っていた私たちをお召しになられました。そこから自分で抜け出すことができないのです。そのような私たちを神様はお召しになられました。その人生を終わらせて、新しいいのちの人生を生きるために、私たちをそこから召されたのです。なぜ私たちが文句を言えるのでしょうか。イエス様のお召しことがよくわかっていないからではないでしょうか。あるいは、もうそういうことは過去のことだから忘れたのでしょうか。そのような苦しみの中、存在そのものが滅びるしかないものであり、その結果、自分なりには生きるために頑張ったのにもかかわらず、苦しみの人生を歩くしかない、疲れて重荷を負うしかない人生を私たちは歩いていたわけです。

もう一つは、その中で答えを全く得られないまま、さまよい続けていた自分なのです。そのような私を主が召されました。それでも頑張ればどうにかなるだろう。努力すればどうにかなるのではないかということでがんばってみたのですが、よりおかしくなるだけなのです。さまよっていました。お金にすべての答えを求めていました。人生の裕福さ、それにすべての正解を求めていたわけなのです。さまよっていたのです。成功を求めてそこに人生の祝福があるからと思いさまよい続けていたのです。つまり、神様が私たちを召されたときには、もう答えがないまま、どうすればいいのかわからないままさまよっていた私たちを見されました。そして、その努力とお金と成功を助けるために、その手伝いになるのではないかということで偶像崇拝をしたり占いに走ったり、あるいは宗教を求めたりしてさまよっていた私たちを主が召されたわけです。なんと感謝なのでしょうか。私たちが神様を探し求めて、それで神様がオーケーしたわけではありません。私たちが神様を愛したので、神様が私たちに愛を注がれたわけではありません。私たちがまだ罪人であったときに、神様がお召しになったわけです。イエス・キリストが十字架にかけられて、私たちに対する神様ご自身の愛を明らかに示しておられます。このように疲れて重荷を背負うってどうすることもできない、間違っている答えばかりを求めてさまよっていた私たちを、すべて疲れて重荷を負っているものはわたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげますと私たちをお招きして、私たちを召されたわけなのです。一言で申し上げると、神様が私たちを召されたのは、地獄から私たちを引き上げて召されたわけです。そのことがわかれば他の何かをいろいろ複雑に考える事はないでしょう。ペテロが一番最初に召されたときに「主よ、この罪人から離れてください」と言います。もちろんその前にイエス様に紹介されたことはあります。でも、それはまだお召しではありません。イエス様自ら、ペテロが失敗しているところに訪ねてこられて、それでペテロに悟りを与えられました。目が開かれたペテロが、自分がどんなに罪人なのか、どんなにダメな存在なのか、それに気づいて「主よ、この罪人から離れてください」と言うようになりました。そのように召されたわけです。自分が神様に召されたそのことを思い起こすとき、涙の他には何もありません。ついつい人間というものは、そういうことを忘れてしまうでしょう。私たちにもいろいろなきっかけがあったと思います。その日を忘れてはいけません。でも、それよりも大切なのは、それを通して罪がが何かがわかったことなのです。滅びるしかなかった私たちを、主が召してくださいました。自力では抜け出すことができないので、私たちを引き上げてくださいました。

それから、それを思い起こしたペテロに向かってイエス様が質問されます。「ペテロ。あなたは私のことを愛しているのか」。ペテロは愛していますと堂々と言える立場ではありません。ついさっきイエス様の前で、３度もイエス様を呪いながら否定したのです。怖くて。それを全て踏まえてイエス様はおっしゃいました。意地悪ではありません。「イエス様、私がイエス様のことを愛しているのは主がご存じではないでしょうか」二度、三度と同じ質問をされます。三度否定したということを想い起こさせるかのように。それで最後には、「主がすべてご存知です」と告白しました。そのような大きな大きな失敗をしたにもかかわらず、イエス様を愛することには変わりありません。つまり、ミッションの結論に導くために、信仰告白は確かめて確認されるわけです。これがプロセスです。神様が召されたことを思い起こさせて、それから、信仰告白が確かなものなのかどうか、それを確かめる作業をなさいます。ペテロは、イエス様の前でこのように告白しました。「主は生ける神の御子キリストです」。私のことを愛しているのかということは、その感情的なセンチメンタル的な愛を言っているわけではありません。神があなたのことを愛しているということを認めるのか。イエスが神様のその愛であることをあなたは未だに信じているのかという確認です。大きな過ちを犯して逃げてしまった人間なので。特に、他の何かを一切問わずに、これだけなのです。私のことを愛しているのか。過去を問わずに、どんな失敗や過ちを犯したのかなどを問わずに、今現在のその人の状況、都合、条件、能力など一切問わずに、1つだけ問い掛けていらっしゃいます。私のことを愛しているのか。つまりイエスはキリストなのかという質問なのです。ペテロは言いました。イエス様、「主は、生ける神の御子キリストです」という信仰告白は本物だったのです。ただ中身の内容等があいまいだったりいろいろあっただけです。その信仰告白には変わりはありません。それを三度も確認しました。今も神様は、私たちに本格的な人を生かすための答えの門を用意して、それから、何をされるのかといいますと、どのように神様に召されたのかわかっているのかということです。以前のあなた方はどのような存在だったのか、どのような人生だったのか思い出しなさいということです。。それからもう一つ、イエスは本当にキリストなのか。イエスはあなたのキリストなのかと問い掛けていらっしゃいます。それ以外には、何も問いかけません。イエスは本当にあなたのための神の愛そのものなのか。それを信じているのか。それがミッションと言う結論に導くために、イエス様が、神様が、クリスチャンの私たちに確かめる内容です。

改めて申し上げます。他の何も問わずに。これが大切なのです。だから、三度質問されました。あなたが三度、わたしの目の前でわたしを否定した大きな大きな失敗を犯したでしょう。それも関係ないのです。それもチャラにしていらっしゃるのです。イエスはキリストなのか。イエスはまことの預言者であり、まことの祭司であり、まことの王様なのか。そうでなければイエスは、エレミヤのような、エリヤのような、バプテスマデのはヨハネのような存在なのか。あなたの健康のために、あなたの家族のために、あなたのお金のために、あなたの子供のために、事務員みたいなそのようなお方なのか。宗教で求めて、そこで何かを得ようとしている、そのような対象なのか。あるいは、イエスは唯一の救い主、悪魔の頭を踏み砕き、地獄の私たちの運命を完璧に処理なさって、神様と出会うための唯一の道、いのちなのか。あなたに絶対に必要なキリストなのか。そのようなことを問いかけていらっしゃいます。難しいテストをしたり、実験をしたりということはありません。これだけです。その時にペテロが、「私はイエス様を愛しています」と言います。そこでミッションが与えられました。つまり、これは何を意味するかといいますと、信仰告白が他の何の条件も関係なく、ただイエスは本当にキリストで、自分のキリストなのかという告白が間違いなければ、あなたはキリストによってすでに今もこれからも幸せなもの、幸いなものだということが間違いないのかという問いかけでもあるのです。これが信仰告白です。だから、私は今幸いなものなのです。死と罪の原理から永遠に解放されて、聖霊が宿る神の神殿と呼ばれる尊い存在であり、どんな被造物も、このキリストの愛から、神の愛から、私を切り離すことできない存在です。いつ死んでも天国に迎え入れられるように、天の御国の国籍を持っているものだし、そして、地上にいる間には、サタンの奴隷ではなくて、サタン、暗やみの力を縛り上げる権威があるし、天使が私を手伝うような存在なのです。私は幸いなものなのです。これから信仰告白なのです。難しく思わないでください。皆さんはどのように神様に召されたのでしょうか。親に連れられて、仕方がなく教会に通っていたら、いつの間にかクリスチャンになったというレムナントもいるでしょうけれども、でも、神様はそのような形で皆さんを召されました。それが幸いなのです。でも、神に召されるときに、私はどこにいたのかということを正しく確認しなければなりません。滅びるしかない運命のところにとらわれていて、どうにもならない苦しみの人生、疲れて重荷を背負っていたわけです。精神的にも肉体的にも様々な面において、家族においても、そして、子孫たちにおいても、いろいろな苦痛を味わっていたそこから私たちは召されました。しかも、答えが分かっていないままあちこち首を突っ込んで、これをやってみたり、これを求めてみたり、ときには誰かのせいにしたり、これのせいにしたりということばかりしていた私たちをです。お金があればいいのか、成功すれば変わるのだろうかということばかり考えていた、そこから私たちは召されたのです。

改めて申し上げます。私たちがまだ罪人であったときに。なんと感謝でしょうか。そこで変わりました。もう以前のものではありません。それから、聞いていらっしゃるのです。イエスはキリストなのか。あなたのキリストなのか。自分のキリストなのか。他には条件はありません。どんなに失敗をしていたとしても、構わないのです。どんな過去があろうが、今現在どんなにひどい辛い状況に置かれていても構いません。イエスが本当にキリストであれば、あなたのキリストであれば、イエス様はおっしゃいます。わたしについてきなさい。わたしがあなたを人間をとる漁師にしてあげる。マルコ13:13-15には、イエス様が、弟子たちを召された理由は、ともにいらっしゃるために、それが幸せというものなのです。そして、伝道させるために、悪霊を追い出す権威を授けるために召されたのです。召されたものは、この信仰告白さえ正しく確かめて間違いなければ、ひとりも例外なくそのような目的のために召されているわけです。これを確認されたイエス様はペテロに、力を失いドロンとしていたペテロに、そして、三度イエス様を目の前で否定したペテロに、それをずっと引きずっていたペテロに、そのときまでは、私は命をかけてでもイエス様を守りますよと放言していたペテロが、恥ずかしくて恥ずかしくてしょうがない、そういう大きな過ちを犯しました。そのようなペテロに向かって、私の羊を飼いなさいとミッションを与えられます。すべてご存知の上で、そのような事は一切関係ない、逆にそういったすべて全部をプロセスにして、この結論のほうにもっていくためにあったものなのです。問題は召されたことですが、そこにとどまっていてはいけません。教会に通う事は幸いなのですが、そこにとどまっていてはいけません。神様のお召し、イエスがキリストであるという信仰告白がどれほど偉大なものなのかといいますと、どんな失敗があろうが関係なく、私の羊を飼いなさいと言われることができるものなのです。ミッションなのです。

そうならば、私たちは結論として、ミッションの人として、残りの生涯を歩いていくということです。その結論は、どんな結論なのかといいますと、ミッションという結論は当然な結論なのです。無理矢理絞り出す結論ではありません。神のお召しのことがわかって、イエスが本当にキリストで、自分が本当に幸いなものであるということが間違いなければ、その信仰告白が本当であれば、当たり前に当然にこれから残りの人生、自分自身の存在そのものは、神様の目的のために生きるわけです。神の目的はミッションなのです。自分の存在、人生の理由が、ミッションなのです。ですから、その結論としてのミッションというのは、感謝と進んで喜んで献身をもって、そのミッションを受け取るようになるわけです。2部の礼拝でも申し上げます。それから、そのミッションは十分な結論です。言い訳など一切いらないように、この世の終わりまでいつもあなたがたとともにいる、聖霊が臨まれると力を受けて、地の果てにまで証人となるとイエス様はおっしゃいました。神の国があなたがたのものなのだ。だから、このミッションというのは、無理やり全うするものではなくて、ミッションを全うすることができるように十分な全てが与えられているわけです。だから、十分な結論なのです。ぜひ、今日からでも始まります。神様の本格的な答えが。そして、私たちが留まっていないで、しっかりたどりつかないければいけないところがミッションなのです。人それぞれ時刻表があるでしょうけれども、「ああハレルヤ、恵まれた」というのはよいのですが、そこにとどまっていてはいけません。ヨハネの福音書の最後の最後はミッションなのです。負担でもイベントでもありません。結論なのです。何のために生きるのでしょうか。何のために存在しているのでしょうか。ぜひ、その結論としてのミッションは、動かないし奪われることもありません。何があっても生きる理由がミッションなのです。これから、このミッションを中心にして、今まではいいこと悪いことだったでしょうけれども、このミッションのためにどういう意味があるのだろうかという見方を持っていきますと、聖霊の導きを受けるようになります。必ず神の御国が臨まれることを体験するようになるでしょう。それなのに、なぜ信徒の方々が、何かがあるたびに揺れてしまうのかというと、ミッションがないし、結論ではないのです。イエスの証人、福音宣教というのが結論ではないのです。

最後に、ペテロがこう言われました。今まではあなたが勝手にあちこちに行っていたのですが、これからはこのミッションなので、神があなたの人生を責任を持って引っ張ると言われました。そして、逆さまで十字架で死ぬようになるということまで言われます。その時にペテロが、もう一人の弟子、このヨハネの福音書を書いたヨハネが隣にいたので、「イエス様、あのヨハネはどうなるのでしょうか」と気になって聞いたわけです。自分が逆さまになって死ぬと言われたので。ミッションはありがたいのですが。そのときにイエス様が「もし私が再び来られるまで、この人も生かせておくとしても、あなたとは関係ないでしょう」として最後を締めくくりました。つまり、ミッションというのは当然で十分なものであると同時に、独立しているミッションなのです。誰かと比較したり、比べたりというようなものではありません。また、他の人がミッションを諦めたからといって、状況が変わるからといって、自分も一緒に連れられたりというようなものではありません。自分は自分のミッション、自分の道を粛々と歩むのです。マイウエイです。だから、比較もせずに、影響も受けずに、独立したミッションの道を歩むようにしましょう。自分自身に与えられているミッションをしっかり見つけるようにしましょう。揺れることなく、また比較もないようにしましょう。それで、皆さんぜひ今自分に与えられている現場、それは皆さんにしかありません。そこから始めましょう。また皆さんに許されている出会いがあります。その出会いは皆さんにしかないのです。そこを無視して人を見たり、人がどうするのか、人と比較したり、それは最後にペテロが気にしたことと同じことなので、それはミッションとしてふさわしくありません。独立したミッションなのです。そして、皆さんに与えられるタラントというものがあるのです。それは皆さんに与えられているものなので、それを大事にしましょう。この人はどうなるのでしょうかと気にせずに、自分の現場、自分に与えられている出会い、自分に与えられているタラントを大事にして、そこでミッションを遂行していくようにしましょう。これが勝利の鍵となるものです。ぜひ、クリスチャンのみなさん、人それぞれ信仰生活がどれくらいになっているのかは違うと思いますが、もうとどまって、なんでだろう、どうしようというような人生は終わりにして、ミッションを結論としてしっかり握るクリスチャンになり、そこから始まる新しい人生、ミッションのために動き、ミッションのために祈り、ミッションのために生きる、それが神の国を生きるということなのです。その新しい人生を歩み、そこにある本格的な神様の答えを味わう主人公になることを心から祈りたいと思います。

（祈り）

恵み深い天の父なる神様。ありがとうございます。私たちは地獄からお召しになってくださり、ひとり子イエス・キリストが十字架で血を流されることによって、私たちはその滅びの運命から引き上げられ、いのちあるものになっていることを感謝いたします。それを思い起こし、そして、どんなことがあっても、何事にも影響を受けず、イエスがキリストであり、自分のキリストである信仰告白と、自分はキリストのゆえに幸いなものなのだという信仰告白をいつも確かめて、そこにある当たり前な結論としてのミッション、福音宣教というミッションの結論を握ってスタートすることができるようにひとりひとりを導いてください。弱さとも関係ありません。過去の自分とも関係ありません。今現在の環境現実とも一切関係ありません。学歴とも健康とも関係ありません。年とも関係ないのでこの2つのことを確かめて、それで神様からのミッションは自分のミッションとしてしっかり握って、ミッションの人生を歩むことができるようにひとりひとりを励ましてください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。